

入れ墨

かつてアイヌ民族には女性がシヌイエ (si-本当に nuye- 描く) という入れ墨をする風習がありました。場所は唇の上下、



佐賀 彩美 (さが あやみ)

アイヌ語地名研究会

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モンレー国際大学院 (現ミドルベリー国際大学院モンレー校) 通訳翻訳学科修士課程修了。通訳案内士。

入れ墨は女の子が初潮年齢に達する頃から、本格的に山菜採取が始まる前の梅雨の時期に各地で行われていて、女性として真に成人したこと

手の甲、前腕などです。胆振西部では、眉間や額に入れることもありました。口の周囲に入れる場合も、樺太や道東、千島列島では円状、道西南部 (渡島、胆振、石狩) や日高、十勝地方は口から耳元までと地域により形が異なっていました。沙流川地域では、右手と左手の模様が異なり一方は碁盤の目状、もう一方はさや型の模様でした。碁盤の目の方は、プクサムリリ (pukusa- 行者ニンニク murir- 組紐= 行者ニンニクのはかまにある網の目状の模様)、さや型の方はウォッキキリ (u- 互いに ok- ひっかかる kikir- 系列= 絹布に見られる豆鞆風の模様) といえます。

アイヌの人々の入れ墨の手順は、まずヤチダモの木の皮を煎じます。ヤチダモはアイヌ語ではピンニですがピンはピリ (pir) で傷、ニ (ni) は木で、傷に対応する木という意味になります。ヤチダモの煮汁は消毒薬として使われました。次に、皮膚を細かく刃物で切り、傷をつけて、そこに白樺の樹皮を燃やして出る油煙の墨を塗り込みます。傷をつける道具は古くは黒曜石 (十勝石)、カミソリが入手できるようになってからはカミソリを使っていました。十勝地方では入れ墨のことを、アンチピリ (anci- 黒曜石の pir- 傷) と言います。天然のガラスである黒曜石は、縄文時代から刃物の代わりに多用されていたことが思い出されます。沖縄の人々もかつては入れ墨をしていましたが、こちらは刃物ではなく針を束ねたものを使っていたそうです。ミクロネシアも針を使います。刃物で切って施す入れ墨は、色素が深く入るため表皮をとっても完全に消すことはできません。そのため、明治政府が入れ墨を禁止するようになり、入れ墨を消したいと思うアイヌの女性たちもいましたが、完全に消すことはできなかったのです。

を意味します。入れ墨が半端な者は嫁にはできないとまで言われたり、入れ墨をせずに死ぬと、死んでから鋸で入れられると聞いて脅かされたり、同性同士で差別されたりもしました。しかし、皮膚を何度も切るわけですから、大変な苦痛を伴います。皮膚を切るだけでも相当痛だけでなく、大きくはれ上がり、口の周りの施術だと食事ができなくなるので、施術前にはお腹一杯食べておき、ヨシ製のストローで重湯を口にすることもありました。

一方、漢方には瘀血^{おけつ}といって患部から出血させることにより血行を良くして体の悪いところを直すという治療法がありますが、入れ墨は同様の治療法として使われていました。特に女性は更年期の症状が軽くなる^{おけつ}として、2度目、3度目の入れ墨を入れることがあったそうです。若い時は傷をつけると鮮血が出るのですが、更年期症状のある女性の場合は、どろりとした赤黒い血だそうです。俗に古血を出すという漢方の治療法としては確立しており、鍼灸療法の基本となっています。

入れ墨は血行の状態も示します。朝の入れ墨の色は濃紺なのに、疲れが出てくる夕方は浅黄色 (薄い空色) になるのだそうです。そのように健康状態をはかるバロメーターでもあったのでした。

最近若い欧米系のインバウンドのお客様にはお洒落の一種として入れ墨をしている方を多く見かけます。日本では魔除けの意味があるとともに、特殊なイメージも持たれがちですが、アイヌ民族にとって入れ墨は立派な伝統文化であり、縄文人も入れ墨をしていたというのは定説です。入れ墨についてもう少し柔軟に考えてもよい頃ではないでしょうか。

*本稿は、アイヌ語地名研究会会長、藤村久和先生を講師として (一社) 北海道開発技術センターが自主事業として実施しているアイヌ文化勉強会の内容を、藤村先生監修の下、筆者が取りまとめたものです。

藤村 久和 氏 北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般 (精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療(整体ほか)等) を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践している。また、アイヌ民俗文化財調査 (北海道教育委員会) に従事し、道内に居住する古老の伝承話の聞き取り作業を行い、その成果が例年報告書として刊行され、資料篇等も随時刊行している。近年は、食育コーディネーターとして北海道の食育計画にも参画する。主な著書: 『アイヌの霊の世界』 (小学館、1982年)、『アイヌ、神々と生きる人々』 (福武書店、1985年)、『アイヌ学の夜明け』 (梅原猛氏との共編、小学館、1990年)、『アイヌのごはん』 (監修、デーリィマン社、2019年)、『平成20~令和3年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1~13』 (北海道教育委員会、2008~2022年) 等。